
魔法戦記バカテスForce ~ IF ~

レフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記バカテスForce~IF~

【Zコード】

Z2084BA

【作者名】

レフエル

【あらすじ】

この作品は魔法戦記りりなのForceとバカと年上の同級生と僕とちつさい幼なじみのクロスコラボとなつております
ちなみにエフ…つまりしもの世界ですので…先に連載してた話とは別作品です シグミとリュウセイの甘いラブシーンを期待して下さい!!
え、なんか違う?細かいことは気にしない

プロローグ～出発式（禮讃歌）

シゲル・セツコ・ウカトの出発式です

プロローグ？出会い

「くわづー、雨かよー、近くに遺跡があつて助かつたぜ」

すた袋を担いだ青年が、古い遺跡の入り口で雨宿りをしていました。
身長は200センチくらいでありますと想われる。

『主、遺跡内に生命反応有り』

彼の持つアームドバイス「マサムネ」が遺跡内に生命反応がある事を彼に告げる。

形状はハリセン型になつてゐるようだ。

「こんな古い遺跡にか？……第六感ビンビン来やがるな。行ってみるか？」

青年は荷物を担ぐと、遺跡内へと向かつて歩き出した。

「随分入り組んだ場所だな。これ本当にただの古い遺跡か？」

『ただの遺跡かまだ不明です』

そんな会話をしながら青年が複雑に入り組んだ遺跡内部を抜け最深部の扉へと辿り着いた。

『『マサムネ』内部の生命反応はビツだ？』

そして、青年は物影に隠れながらマサムネに内部の生命反応を数えてもうづ。

『ふむ。男性が5、女性が1。武装反応は無し』

「よしーんじゅ 行つてみるか!」

青年はそういふと扉を蹴破り、内部へと侵入した。
其処にはポッドの中に入つたちつこい女の子と白衣を着た男性が5人いた。

「し、侵入者だ!」

「警備は何をしているんだ!」

「それよつもこいつを運ぶんだ」

白衣の男性達が青年を見てざわざわと騒いだ。
もう一人の白衣の男性が持つているポッドの中にこもつこい少女は眠つているようだ。

「……何だ?この女の子を見ていると譲りたい気持ちになつてくる

『主、それは恋と言つ物では?後、管理局に連絡するか?』

ポッドの中にこもつこい少女を見て青年が呟くと『マサムネ』が声をかけて答えた。

「ん~、先ずは此奴等全員縛り上げて、それから考えるぞー。」

そつ言つて青年は白衣の男達に飛びかかった。

一分後　。

「一トアガリつとー」

見事に縛り上げられた白衣の男達とポツドの前に立つ青年が居た。

「さて、取り敢えず、この女の子出すとするか」

青年が拳を握り締めポツドに叩きつけると、甲高い音と共にポツドは碎け散り中に居た女の子が青年に倒れかかってきた。

「おつとど」

『主、なにか嫌な予感があるのでですが』

青年が女の子を支えて抱き上げるとマサムネが警戒した様子で呟いた。

「大丈夫だろ…つー?」

青年がマサムネを見て言おうとすると田に痛みがきて、女の子を落とさないようにして膝をつく。

『主ー大丈夫ですかー?』

マサムネの心配そうな声が響く。

「あ、ああ。大丈夫だ」

「……」

青年が返事をしているといつの方にか女の子が目を開けていて青年を見ていた。

「ん、目が覚め……！？」

青年が女の子の視線に気づいてそちらを見ると女の子が全裸なのに気づいた。

「ま、マサムネ！ 服かなにかないか！」

『それらしき物ならありますよ、主』

青年が焦って言うとマサムネは周りを物をサーチして教えた。その場にある青年が持ってきてその服を女の子に着せた。

「……」

「えへっと、大丈夫か？ 名前解るか？」

じーと青年を見る女の子を見て聞くと

『主、人に名前を訪ねるのなら自ら名乗るのが先なのでは？』

マサムネに突っ込まれ、青年ははっとする。

「そういうや、そうだ。俺の名前はリュウセイ。リュウセイ・サカキだ。君は？」

「……私はツグミ。ツグミ・ショトロゼック」

リュウセイとシグミが互いに自己紹介を済ませた直後だつた。

《警告》

研究施設内にけたたましい警告音が鳴り響く。

「なんだあ！何が起こつたんだ！？」

『主、それがしの嫌な予感が的中したようですぞ』

「……私をポツドの中から出したからだと思ひ」

慌ててのリコウセイとマサムネにツグミがポツリと呟く。

「なら、行くぞツグミー此処から脱出するー・マサムネ、セットアッ
プ!」

「モルヒネ」

御意！

リコウヤイヌシグリを正面で抱きかかえると、マサムネをセツトマップする。

シグミは悲鳴をあげながら、リュウセイの身体にしつかりとしがみ

ついていた。

『主、そこを右に行けば出口です』

「了解ー。」

「ふみゅみゅみゅーーー?」

マサムネの壇に従いつづくミミを抱っこしたまま走る。

プロローグ？出番つい（後書き）

感想と評価をお待ちしております

もしも、先にリュウセイがシグニ!!と圧倒っていたら?
とこつ物語となつておつまよ～

プロローグ？

ドカーン……！

「はあはあはあ……よつしゃあーどんなんもんかいー。」

「ふみゅー」

間一髪、崩壊から逃げ出したリュウセイがふとシグミを見ると見事に田を回していた。

「あいや？」

『主、何時も通りに走り回ったのですか？』

マサムネの指摘に頭を搔いてうなだれるリュウセイであった。

「失敗したなー」

『主、反省してるのでなら別にいいですが。そろそろ野営の準備をしませんと』

リュウセイが苦笑いするとマサムネが伝える。

「やうだな。そつするか

そつ眩いでリュウセイは野営の準備をしてテントを張り、そこで焚火をする。

「みゅ……？」

「おー、田覚めたかー？」

ツグミが田覚めた時には辺りは暗くリュウセイに抱っこされたまま
だった。

「みゅー……／＼／＼はつー遂和んじやつた／＼／＼

ツグミの中には別世界のつぐみの記憶があった為、遂リュウセイに
甘えてしまったツグミであった。

「へす ツグミは甘えん坊だな

そう言ひてツグミの頭を優しく撫でるリュウセイだった。
それがビートなく心地よくて田を開じるツグミがいた。

『主、これからどうなさりますか？』

「やうだなー……ツグミをみつとくわなにもいかないし

マサムネが聞くとリュウセイはツグミの頭を優しく撫でて答える。

「ツグミー、俺と一緒に旅しないか？」

「ー……ここなの？」

リュウセイはどこか不安そうなツグミを見て笑顔で言つたツグミは
小首をかしげて尋ねた。

「ねつ…よべ言つだら、旅は道連れ世は情けつじれ」

「行く…お兄ちやんと旅したい…！」

リュウセイが笑顔で言つとシグミは笑顔で答えていた。

「じゃあ、決まりだな。明日は早くに起きて近くにある街に行つて服やら買おうぜ」

「うん！ ありがと、お兄ちやん！」

リュウセイは一カツと笑つて言つとシグミは嬉しそうに笑つて抱きついた。

この時、シグミのなおきなふくらみがあたつてるのでリュウセイはなるべく我慢していた。

同時刻の第12管理世界フローティキア St.・《セント》ワレリー港

上空をへりコプターが飛んでおり、燃えてる建物があつた。

「お疲れ様です。フロイトさん、ティアナ執務官！
押収物には該当しそうな品、ありませんでした」

眼鏡をかけて茶髪のロングの女性が言つと

「そつ。銀十字モードバイダ もレージャなかつたか

金色の長い髪を一つにまとめている女性が呟いた。

「『Hクリップス』の感染者を出すわけにはいきません」

「うん」

茶髪のロングヘアの女性が銃機を持っている方が呟くと金髪のロングヘアの女性が頷いた。

「もしも感染者が出たのなら」

「なんとしても捕獲しないと」

二人の女性は決意するように呟いた。

プロローグ？（後書き）

感想と評価をお待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2084ba/>

魔法戦記バカテスForce～IF～

2012年1月5日18時50分発行